

潮風のブドウ畑 富岡

とみおかワイナリー正式オープン

昨年7000本を製造

東日本大震災による津波と原発事故で、富岡町は大きな被害を受けた。とみおかワイナリーは「ゼロになった富岡町を作り直すことによって、マイナスの感情から気持ちを前向きにする場所にした」と「震災前よりも良い町にしたい」という思いでワインを生産している。海から150m、富岡町からも200mのワイナリーの建物は今年5月17日に正式オープン。富岡に新しい産業を生み出した。

社長の遠藤秀文さん(53)は、震災の避難生活の中で「富岡町から何もなくなくなってしまうのではないか」という危機感をもち、2016年に仲間10人でブドウ作りをスタート。町の再生を「若い世代へつなぐこと」を考えて、ワインづくりに取り組んでいる。

最初に植えたブドウの苗木は200本。3年目で数十本を収穫することができ、50本ほどのワインになった。海の近くでもブドウを栽培することができることが分かったことから本格的な活動が始まった。この9年間でブドウ畑を6万平方メートル(東京ドームの1・3倍の広さ)まで広げた。昨年のブドウ収穫量は7300本で約7000本のワインになったという。遠藤さんは「世界から



とみおかワイナリーの畑で育てられているブドウ



津波に耐えて唯一残った蔵

ジャーナリスト
スクール第6班

「ありがとう」を世界中に

醸造タンクに8つの言語

とみおかワイナリーのワインの醸造用のタンクには「ありがとう」と、日本語のほか英語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語、インドネシア語、ウクライナ語で書かれている。それは、遠藤さんが過去に訪問した愛知県の醤油屋さんのタンクに「ありがとう」と書かれていたのがきっかけ。発酵食

品も生き物なので「ありがとう」の気持ちを込めて造ると、そのプラスの言葉に品質でこたえてくれるという。この考えに賛同した遠藤さんは、ワインのタンクにも自分が訪れた国の言葉で「ありがとう」と書いた。富岡に海外から来る多くの人たちにも前向きな気持ちになってほしいという。ワイナリーのロゴマーク



8つの言語で「ありがとう」と書かれた醸造用タンク



とみおかワイナリーのロゴマーク

も活気あふれる町になることを望んでいる。遠藤さんは「ピカッとキラッと輝く富岡町に新しく作り変えていきたい。とみおかワイナリーをどんどん成長させていきたい」と語った。

編集後記

とみおかワイナリー創設の道はとても大変で、最初の収穫に約3年かかったそうだ。東日本大震災で富岡町はすべてを失った。ワイナリーはそんな富岡町をつなぐ存在である。100年先の視点を持つワイナリー造りをすることで復興を後押ししている。社長の遠藤さんが「無理だ」と周りに言われてもあきらめない。できないで止まるのではなく、できるに変えていく。と話していたことに感銘をうけた。この取材を通じて、恐れずに挑戦することの大切さを改めて知った。挑戦する心を持ち私たち若い世代も持ち続けなければならない。(伊藤唯)

若い世代へつなぐ町再生

食、人、地域を結ぶ役割担う

遠藤さんがプロジェクトの目標として挙げたのは「コミュニティの再生」だ。震災前の富岡町の人口は1万6000人。震災で0人になった町民は、現在2500人になっている。そのうち、もともと富岡町に住んでいた人は1000人をきり、残りの1500人は移住者らだという。昨年、とみおかワイナリーでブドウの手入れなどのボランティアに関わった人や富岡町を訪れた人、いわゆる関係交流人口は現在の人口と同じ2500人になった。



ワイナリーについて説明する遠藤さん

関係交流人口が増えていくことで、富岡町のコミュニティの輪が広がっている。遠藤さんは「自分たちが頑張り、若い世代へまちづくりのタスクをつないでいきたい」という。ワイナリーは食、人、地域を結ぶ役割を担っている。ブドウの木は大事に育てると、100年先まで実がとれるという。ワイン醸造は100年、200年の視点を持つ



私たちが作りました

- 鈴木 日菜 (富田東小5年)
- 阿部紗也子 (福島大付属小6年)
- 野村 実礼 (桜の聖母小6年)
- 作山 結音 (ふたば未来学園中2年)
- 伊藤 唯 (石川義塾中3年)
- 本田 結 (橘高1年)